

---

# MOND

千石御堂

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MOND

### 【Nコード】

N5426D

### 【作者名】

千石御堂

### 【あらすじ】

永きに渡り平和を謳歌してきた”アウスガルド”。幸福に満ちた彼の国も、今や大国の脅威に曝されつつある――。祖国の脅威を感じた少年・イクセルは仲間と共に国を旅立つ――。

## プロローグ く世の始まりく

遙か昔――

世界が四散していた神代の時代。

かの崇高なるシリオンと組する神々は人世の国を創造された。

偉大なる神々は、万物の始祖たる化身、エクフィットの体を分解し世を創る。

2

即ち、肉は地に、血は海に、骨は岩石に――

模られた世に、神々は七つ神を集め、彼らに人たる生物を造らせる。

こうしてアウルガルド――即ち、我々で言う所の人間界は形成されるに至った訳なのであ

る。

神王たるシリオンはその偉業を終えるや虚空に一陣の光を放ち、虹の橋を架ける。そして神々は橋を渡り彼の国へ還って行った——と、ヴァルカの高書には綴られている。

だが、七人の神々、即ち我々の創造主たる”七の月”達は人間の世に留まり、今もなお、アウルガルドの平穏を守っている——

大いなるシリオンと、七の月に栄光あれ——

——ヨラス筆記 ”アルメドルチエの破戒講義論集” より。

## プロローグ 〳世の始まり〳（後書き）

またなんか始めてしまった・・・（汗

まだ初心者（？）ですが、宜しくお願いします。

## 英雄の時代 第一章 (1)

この世はとかく矛盾に溢れているのだ。

それに気付いたときと言うのは得てして手遅れである場合が極めて多い。

年端もいかない少年、イクセル・ベッシュも例外なく、世の矛盾に憤りを感じ始めたのは課題の期限二日前のことであった。

「だあああーっ！！終わるわけねえええっ！！」

イクセルがこう叫んだのはこれが本日五度目であった。

丁度、イクセルが特別に休暇に出されたレポートを手伝い始めてからそろそろ3時間は経っている。

そろそろか、とは思っていたが、予想以上に持たなかった、と言うわけだ。

「それで、結局バテテ僕にやらせる訳だ」

クルトは半ば諦めの表情で突っ伏したイクセルを見据えた。

「しょうがねえだろお？」イクセルはぼやいた。

「だって、ルーの爺さんったら云う事がめちゃくちゃなんだもんよお」

見ると、イクセルのレポート用紙は未だ綺麗真ツ白である。書き殴つてある字も古代象形文字と錯覚するような解読不明の文字で書かれている。

「あのクソ爺、『ハッキリ言おう、イクセル、お前は少し足りない』

だと！？舐めやがってあんにやるおっ！」

「・・・しょうがないんじゃないかな、この際言われても」

「・・・どういう意味だ？」

「そのまんまの意味で受け取ってもらって構わないよ」

「まあからあ、その”意味”を知りてえんだけどなあクルトちゃん」

「つまりキミが悪いのさ、イクセル」

「・・・」

「・・・まあな」

そもそも何故このような事態になってしまったかを説明すると、6日前に遡ることになる。

アルメク大陸マナルタス半島の最南端にあるアウスガルドは比較的  
他国からの侵略に怯えることなく暮らしてきた国家である。

これから始まる物語もまた、この小国アウスガルドから始まること  
を記憶しておいて欲しい。

前述の通り、アウスガルドは比較的他国からの侵略などに対して危  
機感を感じることなく暮らしてきた。だが、ひとえにこれはマナル  
タスの地形による恩寵である。

マナルタス以北に広がるアグリア山脈は”アルメク最悪の難所”と

も呼ばれ、”恐れを知らぬ旅の民”もまた、ここだけは避けると言われる。そのため、マナルタス以北からアウスガルドに来る場合、大回りして、ウィシユゲヒドの大森林地帯を通らなければならない。しかし、この森も矢張り安全とはいえない。猛獣禽獣が出るのは勿論のこと、エルフ自治区やフォモール族の集落を通らなければならない。彼らは人間に対して敵対的ではないが、決して自分の縄張りに人が入るのを良しとはしない。従って大森林に行くのも賢い選択とは言い難い。

だからこそ長い間アウスガルドは平和を謳歌してきたのである。同時に”アルメクーのド田舎”と言われる由縁もここにあるのだが。

だが、クルトはそれでもいいと思っている。クルトは代々史学家としてアウスガルド・ベルニ地区に住んでいる一家の次男坊だが、それだけに幼い頃から様々な国の歴史を学んできた。

そのため、他国が様々な侵略戦争の魔の手に蝕まれていることを嫌と言うほど知っているからだ。

・・話が随分と脱線した。そろそろ話を戻すことにしよう。

丁度クルトの親友であるイクセル・ベツシュが四苦八苦しているのは、この国唯一の侵略戦争であるダルカ戦争についてのレポートである。

ロクな歴史の残っていないアウスガルド史としては最大のイベントなのだが、このダルカ戦争というのは各国の利害関係が絡んで起こった、

非常に複雑でごちゃごちゃした戦争でもある。

故に、一番のイベントなのに史学の中では一番嫌われている出来事なのだ。

そんなわけだから当然イクセルにも嫌われている。と、いうより彼は学問全般が大嫌いなのだが。

史学家のルスラン先生が彼”だけ”に特別課題を出したのも、恐らく範囲が難しいからと言うよりは、単に彼が普段サボり過ぎていることに原因があると思われる。

そんな訳で、長期休暇中に彼”だけ”に出された宿題を手伝うことになり、今に至る。

「だあゝゝっ・・・終わらねえゝゝっ・・・・・・・・！！！」イクセルは再びデカい声でぼやき始めた。

恐らく、図書館を追い出されるのもそう遠くはないだろう。

クルトは深い溜息を吐いた。

## 英雄の時代 第一章 (2)

「なあクルト……」

「ん？」

「俺、どうしたらいいんだろーな……」

「……どうしようもないんじゃない？」

「おいおい薄情過ぎるだろ……俺達や大の親友だろ？もうちょつとこつ真剣にさ——」

「キミが真剣にやってりゃ、こんなことにはならずに済んだんだけどね」

「……すまねえ」

結局、図書館を追い出された今に至っても全く宿題は終わらず終いだ。

「ねえイクセル。こうなったら素直にルスラン先生に正直に言うしかないんじゃない？」

実に明快な回答である。だが明快過ぎるのである。

呆れた様な顔でイクセルはクルトを見据えた。

「お前は成績優秀児だから知らないかもしれないけどなクルト、ルスランのじーさまはな、アレ課題忘れるとお前、それこそ火がついたような、こおんな鬼みてえな面に——」

「鬼みtainな顔で悪かったな、イクセル？」

「ああ悪い悪い。あの顔は凶悪そのものだ——ってああああ！！」

？」

いつのまにかイクセルの真後ろに長身の老人が立っている。アウスガルド国立学校史学・政治学科教師——ルスラン・クラフツォフである。

ルスランは長い顎鬚をけつたいそうに撫で付けると、イクセルの髪を掴んだ。

「いだったっ！？や、やめ、やめて下さい！！ルスラン先生！！」

イクセルは自分の真つ赤な髪を必死でルスランの手から引き剥がそうと努力するが、ルスランは逃す気はないらしい。

「いいか、イクセル。何度も言うようだが、お前は思慮に欠けている。このように課題を何時までもやらずにそのままにしておくのがいい例だ」

「げっ！？き、聞いてたんですか先生・・・」

「当たり前だこの愚か者。私が普段から云っておるだろう。できることは出来る限り早くやれ、とな」

「いや、でも——いだったっ！！」

「でも何もあるか。貴様の脳味噌には学習能力が備わっておらんのか全く」

ルスランは愚痴を零しつつイクセルの頭を離すと、今度はクルトに向き直った。

突然自分に矛先が向かったため、クルトはビックリして肩をすくめた。

「クルト。お前にも何度も云っておるだろう、コイツの面倒を確り見ておいてくれと」

「は、はあ。すいません」

「まあ——クルトに愚痴を言っても仕方がないのだが。全てはこ奴に原因があるというのは間違いないのだからな」

そう言うと、ルスランは再びイクセルの方に向き直った。

イクセルは第二ラウンドが来るのかと思ひ慌てて頭を抑えた。

が、予想に反して老教師は深い溜息を吐くと、静かに告げるのみだ

った。

「それに今はカールブルク側の奇襲が何時くるかも分からん。あまり子供二人でこのような時間にうるつくのではない。分かったな」

「カールブルクの？」

「クルトは思わず呟いた。」

「返事は？」

「は、はいっ！！！」

ルスランの凄みに釣られて二人はほぼ同時に返事した。

「——宜しい。それでは速やかに家に帰ることだ。ではな」

そういうと、怒れる老教師は足早に夕闇の中へと消えていった。

「ちくしょー・・・なんなんだよどっから出て来たんだよあのオッサン・・・」

イクセルが捨て台詞を愚痴りながら旧市街の方を注意深く眺めた。

「ねえ、イクセル？」

「ん？」

「実際の所、どうなの？カールブルクとの様子は？」

「んー・・・オヤジの話だと、かなりヤバイみたいだな。どうやらリメルタやポルセスも中立に立つちまったみたいだしなあ・・・」

「そっかあ・・・」

イクセルの父はアウスガルド軍の伍長である。従って、その息子であるイクセルにも自国の情勢が流れるわけなのである。

ここでシレオン暦800年頃のアウスガルドの様子を少し見てみよう。

今まで数々の山々や大森林に守られ、尚且つアルメク大陸中央部か

ら離れているからこそ平和を謳歌してきたアウスガルドだったが、最近はそのでもない。

かつてアルメク大陸一の大国であったモガリツド帝国が内乱戦争によって分裂して以来、アルメク大陸には大小様々な国家が生まれた。その際、いち早く大国にのしあがったのがカールブルクである。

アルメク中部やや東に位置するカールブルクは海産資源にもに於いても恵まれており、軍事・文化共に非常に秀でた国として他国との歴然とした差を常々見せ付けていた。特に近年は野心的な王であるクリスト六世の侵略行為に因って様々な小国がその餌食になっている。

アウスガルドもまた、例外ではない。

元々、アウスガルドという国はモガリツド帝国の内乱を逃れたアウレア民族がアグリア山脈を逃れ、辺境の地に建国した国家である。

いままで他国との交流といえば、山脈を隔てたりメルタ大公国やポーレ神聖国との付き合いが細々とある位だった。しかし、最近は航海技術も少しずつ発展しており、アルメク大陸中枢の国々との付き合いも僅かながら始まっている。

それだけなら良いのだが、問題はカールブルクの野心的侵略にもそれが通じる、ということである。

つい先月もカールブルクの船がアウスガルド近海をうろついていたとの報告がある。

生憎、今までアウスガルドは海からの攻撃などが皆無に等しかったため、海軍力は極めて乏しい。

ルスランの言葉を借りれば、何時カールブルクの襲撃が来るとも分からない、正に一種即発状態にこの国は置かれている、というわけ

だ。

## 英雄の時代 第一章 (3)

ほの暗い中心街の明かりがアウスガルドの寒空を照らし出す——。一年を通して薄ら寒いこの国では、毎夜の度に闇に霧がたつ。この国では特に珍しくもないことなのだが、他国から遙々やってきた者にはかなり奇異な光景に見えるようだ。濃い霧の中に蜃気楼のように明かりが浮かび上がる。

成る程——確かに幻想的な光景でなのかもしれない。

その幻想的な明かりの中から、逸れた妖精のような明かりが一筋零れ出した。

一筋の頼りなげな光は闇夜をうねる様に駆けている。

良く見ると、妖精でない事は直ぐにわかる。はぐれ妖精でもなければ一体この明かりは何か？

——イクセルと、クルトである。

イクセル達が闇夜を駆けていたのは他ならぬ家路を急いでいた為である。なぜ急いでいたのかと言われれば、何よりも腹が減っていたからだ。

「悪いね、イクセル。またお世話になるよ」

カンテラを持って先頭に行くクルトが背に向けて叫んだ。クルトはここ最近、ずっとイクセルの家に泊まっている。

「ああ、俺は構わないけど、いいのか？クルト」

イクセルが少し遠慮がちな口調で叫び返す。

「何が？」

「ホラ、さ……家の人たちが心配したり——」

「しないよ」

クルトは鋭く切り返した。

「あ、ああ……そうだな」

イクセルも気まづくなった空気を察したのか、以降は無言のまま夜道を走った。

野暮を承知で、分かり易い様に説明をしておこう。

クルトの家が史学博士をやっていることは以前述べたと思う。クルトのフルネームをクルト・ティセリウスと言い、父であるヤーニツク・ティセリウスは王家御用達の歴史家である。母を幼い頃に亡くしたクルトにとっては、唯一の肉親であるが、職業柄、家に寄り付くことが殆ど無い。そのため、クルトの世話は下女であるミランダと下男であるトゥーダンがしている。二人はクルトを非常に可愛がり、また大事にしてくれるが、クルトはやはりこの家族が気に入らない、という訳だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5426d/>

---

MOND

2010年11月11日23時53分発行